

畧 序

大正十年六月下旬より八月中旬に及べる神戸全市の諸争議は三菱三社及川崎造船所に於ける争議を其代表的なるものと認め本號以下五卷に涉りて詳述せんとするものなり。抑も、神戸市に於ける兩社の大争議は六月二十六日、三菱及川崎兩社に於ける労働者の動搖及蹶起を起點とし、三菱にありては七月七日の流血と破壊の慘を見るまで、川崎に於ては同日の青襪隊暴行事件に到るまでを第一とし、七月二十九日賀川、久留兩氏を初め幹部總檢舉までを第二期、爾後最終宣言に到る二週日を第三期とするは最も自然的なる分界なるべし、川崎造船所に於ける青襪隊暴行事件は労働者の極度の激昂を誘發し、遂に最後の決心をなさしめたるもの、その暴行なかりせば労働者は松方社長（三）の歸社まで隱忍就業したりと信すべき理由あり。無智にして不逞なる片福組の人足は川崎造船所一萬數千の労働者を驅つて大罷業渦中に投ずるに到らしめぬ。本號は印刷の都合上、川崎造船所に於ける兵庫分工場職工が、東神鐵工組合幹部（友愛會所屬）を中心として、電正會の要求を要求として蹶起するに到れるまでを記録するの止むなかりしを遺憾とす。

神戸争議に先立つて發生せる大阪諸争議が労働者に工場委員會制度を與へ、友愛會をして昨年十月にありては其大阪聯合會所屬員五百に過ぎざりしを現在一萬を超ふるに到れる盛況を呈せしめ労働運